

# 大津市瀬田・田上地区の景観

林 珠 乃  
Tamano HAYASHI

理工学部環境ソリューション工学科 実験助手

Laboratory Assistant, Department of Environmental Solution Technology



本稿では、龍谷大学瀬田学舎の位置する滋賀県大津市の瀬田地区と、瀬田地区の南側に隣接する田上地区の景観について解説する。

## 景観と景観生態学

日本語の「景観」は、ドイツ語の「Landschaft (ラントシャフト)」の訳語として、植物学者の三好学によって与えられた言葉である。Landschaft とは、“地域”という意味で使われ始めた言葉であるが、16～17世紀頃に、フランドル・オランダの画家によって風景画（Landschafts-malerei）が描かれるようになると、“地域”に加えて“風景”という意味合いでも用いられるようになった。18世紀になると、イギリスで台頭した農村風景を模倣した形式の庭園、いわゆる Landscape garden（風景式庭園）が流行し、Landschaft-Landscape が持つ意味合いのうち視覚的に認識される風景としての側面がより強調されるようになった。

1930年代、ドイツの植物地理学者のトロールは、生態学的視点で景観を解析する景観生態学を提唱した。トロールは景観概念に景観を構成する要素の垂直的關係と水平的關係という三次元的な視点を加えた。つまり、ある地域を構成する気候・地形・地質・土壌・水・動物・植物といった要素の垂直的な関

係の結果、等質なユニット、エコトープが形成され、さらに自然条件と人為条件の影響を受けてタイプの異なるエコトープが水平的に配置される。このような仕組みで表出したものが景観である、と捉えたのである。以降、景観生態学は地理学・緑地学・生態学等の研究分野を背景として、景観の構造・機能・変化を解き明かし生物多様性・生態系の認識および保全・再生に貢献する研究領域として発展している。

## 瀬田・田上地区の概要

龍谷大学瀬田学舎は、琵琶湖南湖の南東部に広がる瀬田丘陵のほぼ中央部に位置する（図1）。近江大橋より南側の、瀬田丘陵と琵琶湖および瀬田川に挟まれたエリアは、瀬田と呼ばれる。大江村・橋本村・神領村・南大萱村・月輪村・栗林新田の六ヶ村が、明治22年の町村制の施行により瀬田村となった地域である。龍谷大学瀬田学舎はかつての大江村に属する場所にある。ただし、外周道路より東側のグラウンドや8・9号館のある場所は南大萱村であったようである。瀬田隣接地もまた、大江村に所属する山林であった。大津市市域図の、瀬田隣接地に該当する場所に記載されている「東中筋」「西中筋」「念仏谷」「二ノ谷」「四ノ谷」「境谷」「狼谷」の地



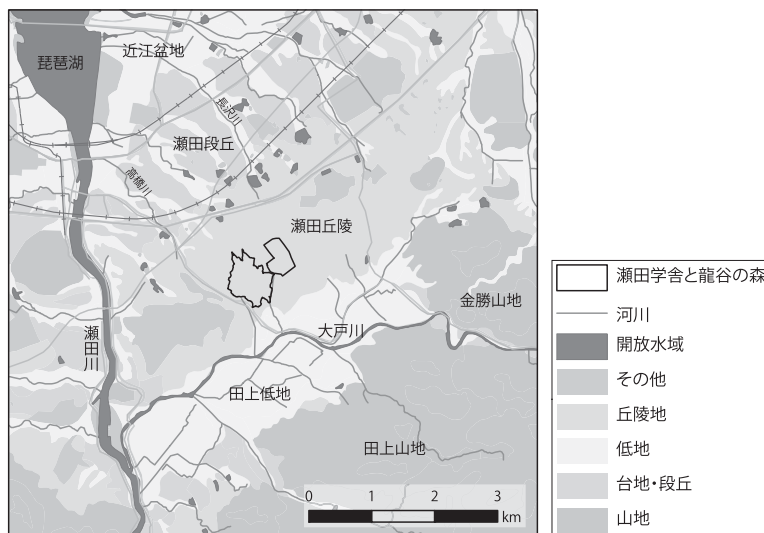


図2 瀬田・田上地区の地形

資料：滋賀県・京都府（1982）5万分の1土地分類基本調査 京都東北部・京都東南部・水口地形分類図より作図，国土数値情報（行政区域データ，滋賀県）（国土交通省）

上山地の一部な，風化と河谷による浸食が進行したバットランド地形が形成されている。また，田上山地には一部にはげ山が見られる。

### 瀬田・田上の地質

瀬田丘陵と瀬田段丘の堆積物は，古琵琶湖層群と中位・高位段丘堆積物からなる（図3）。古琵琶湖

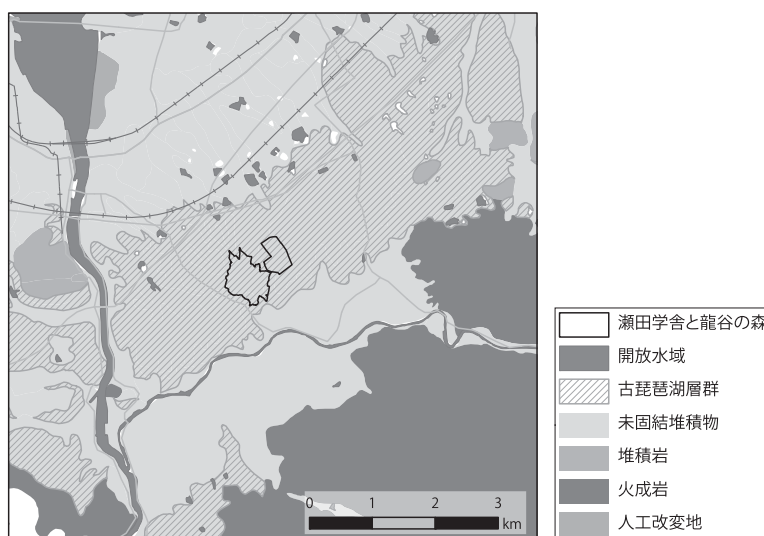


図3 瀬田・田上地区の地質

資料：滋賀県・京都府（1982）5万分の1土地分類基本調査 京都東北部・京都東南部・水口 地形分類図より作図，国土数値情報（行政区域データ，滋賀県）（国土交通省）

層群は鮮新から更新世（約 500 万年前から 1 万年前の期間）にかけての湖沼成堆積物である。琵琶湖は、約 600～500 万年前に三重県の伊賀・上野地方で発生し、1 年間に約 1.5～3 cm のスピードで北へ移動してきた古代湖である。古琵琶湖の移動した跡には、底に溜まった砂・泥・礫などの堆積物からなる地層、古琵琶湖層がある。瀬田丘陵の最も上位の古琵琶湖層群は、草津層に属する瀬田礫層である。この層は、前期更新世（約 259 万年前から 78 万年前）に堆積したと考えられており、花崗岩質の粗粒砂を含んだ中～大円のチャート礫を含む。追分町から神領町にかけての瀬田丘陵先端部には、風化の進んだ中礫のチャートからなる高位段丘堆積物や黄褐色の砂礫層からなる中位段丘堆積物がある。

田上山地は主に、白亜紀後期の火成活動により形成された粗粒黒雲母花崗岩からできている。田上の花崗岩の中には、大小の晶洞が発達しており、水晶や長石やトパーズなどのペグマタイト鉱物が産出される。田上盆地には、大戸川および天神川等の河川を經由して田上の花崗岩山地から供給される砂が堆積している。

## 瀬田・田上の植生

瀬田学舎のある瀬田地区は、主に 4 タイプの植生によって覆われている（図 4）。森林部はアカマツが優占する常緑針葉樹二次林と、コナラが優占する落葉広葉樹二次林である。丘陵の南西部はゴルフ場が開発されている。また、瀬田学舎や文化ゾーン、滋賀医科大等の用地が造成され、市街地による浸食も進んでいる。瀬田丘陵全体を見渡してみると、瀬田隣接地と瀬田学舎北東部は、瀬田丘陵に残存した貴重な森林地帯であることがわかる。瀬田段丘およびその下に広がる低地は、一部農地が存在するもののほぼ全域にわたって市街地が広がっている。

対照的に田上地域においては、市街地は瀬田丘陵および田上山地の麓部にとどまっており、広い面積にわたって耕作地が分布している。田上で産するコメは水晶米と呼ばれ、ブランド米として流通している。田上山地の植生は、瀬田丘陵と同様に、アカマツが優占する常緑針葉樹二次林とコナラが優占する落葉広葉樹二次林が分布するのに加えて、アカマツの植林地も広い面積を占めている。（後述のように、

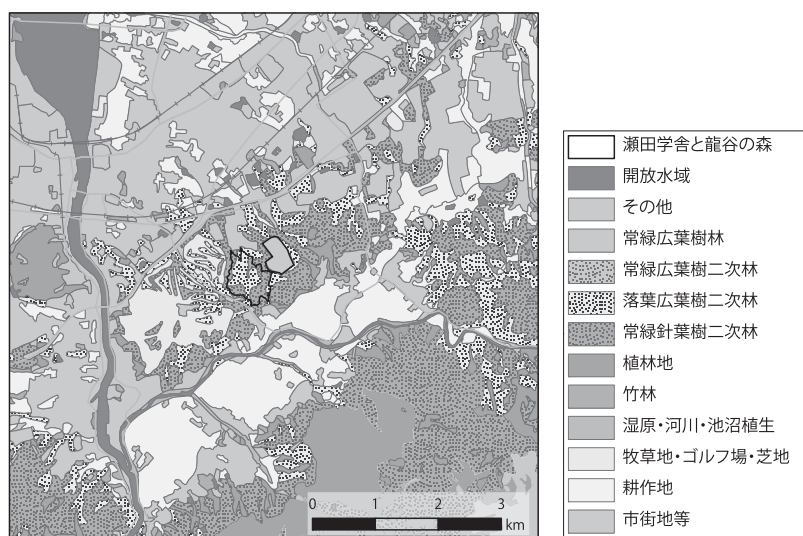


図 4 瀬田・田上地区の植生

資料：自然環境情報 GIS データ 第 6・7 回自然環境保全基礎調査・現存植生調査 瀬田・朝宮（環境省）、国土数値情報（行政区画データ、滋賀県）（国土交通省）

田上山地に植栽された主な樹種はクロマツとヒメヤシャブシであるが、今回利用した自然環境情報 GIS データではアカマツ植林地と分類されている。）

## 田上における砂防の歴史

田上山地に見られるマツ類の植林地は、日本の砂防の歴史を示すものである。田上山地は千数百年前にはヒノキの美林として有名な地であった。田上山の木々は、藤原京（690 年着工）、南都七大寺、石山寺（760 年建立）、延暦寺（786 年建立）の建立に用立てられるために伐採された。その後、度重なる戦火による消失や、信楽での製陶に用いる陶土の採掘と燃料木材の伐採の圧力を受けつづけた。先に述べたように、田上山地の地質は花崗岩である。花崗岩は、風化が進むと脆く崩れやすくなり、表土が流出して植生が回復しにくくなるという性質を持つ。このような自然条件と人間活動の結果、近世初期には田上山地は全山がはげ山になっていた。田上山地からの土砂流出を受けて、天神川等の流出河川や大戸川は天井川化し、洪水を頻発する暴れ川となった。これに対して、江戸幕府は、土砂留工事を行い（1686 年～）、木の根掘りや樹木の伐採を禁じ植林を命じる「諸国山川掟の令」を發布（1666 年）するなどの対策をとった。

明治時代になると、明治政府はオランダ人土木技術者を招聘し、彼らの指導の下河川砂防事業の直轄工事を開始した。花崗岩地帯であっても活着・成長ができるクロマツとヒメヤシャブシ等が選定され、これらの樹木を積苗工により植栽する山腹工事が行われた。また、鎧ダム等の大規模な砂防ダムが建設された（1888 年施工）。これらの砂防事業には、オランダ人技術者以外にも多くの日本人の篤志家や地元の人々が関わった。1878 年以降国の直轄事業とし続けられてきた田上山地の砂防工事は、2013 年に完了宣言が出された。田上山地に見られる植林地は、一度破壊された自然のバランスを取り戻すための人々の奮闘の軌跡なのである。

## おわりに

本稿では、瀬田・田上地域の景観を構成する要素のうち、地形・地質・植生に焦点をあて、その違いを比較した。瀬田と田上は隣接した地域であるけれども、白亜紀の火成活動や 600 万年前以降の古琵琶湖の移動等の影響を受けた結果、現在では地形・地質・植生の要素の組み合わせが異なっている。さらに、それぞれの自然条件に応じた人間活動が景観の地域性をより鮮明にしている。本稿では紹介しなかったが、瀬田地域にはまた独自の、ため池開発による灌漑や、湖岸開発の歴史がある。これについては、拙稿（林、2012）を参考にされたい。

地形・地質といった、長大な時間の中で形成された自然の鑄型を、私たちの生活や文化に合わせて成型し、現れたものが景観である。景観の成り立ちに触れたとき、自然の力への畏敬と、生活をより安定に快適にせしめようと奮闘してきた人々への愛おしさを感じる。と同時に、現在この土地に生活している者としての責任も覚える。この土地での暮らしを未来に繋ぐ役割を果たすためのヒントは、その土地の自然条件と過去の人間活動—つまり景観を理解することにある。自らが住む土地の景観を理解し意識したうえで日常生活の意思決定をすることは、実践的な環境保全活動といえるのではないだろうか。そのためにはまず、自分が暮らす土地の景観を知ることが大切なのである。龍谷大学瀬田学舎に学び働く私たちは、瀬田・田上の景観を知る必要があるのである。

## 参考資料

- 大津市（1973）2500 分の 1 大津市市域図
- 『角川日本地名大辞典』編纂委員会編（1979）角川日本地名大辞典 25 巻 滋賀県、角川書店
- 牛尾洋也（2015）景観概念の変遷と景観保全の法整備 村澤真保呂・牛尾洋也・宮浦富保編 里山学講義、晃洋書房 pp 207-235
- 武田和彦（2006）ランドスケープエコロジー、朝倉書店
- 横山秀司（1995）景観生態学、古今書院
- 林（2012）南大萱の環境史、牛尾洋也・鈴木龍也編里山

- のガバナンス：里山学のひらく地平，晃洋書房 pp 187-211
- 横山卓雄（1995）移動する湖，琵琶湖－琵琶湖の生い立ちと未来，京都・法政出版
- 「琵琶湖」編集委員会編（1983）琵琶湖－その自然と社会，サンプライト出版
- 脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原 琢・中野聡志・竹村恵二・田口雄作（2013）京都東南部地域の地質－地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），産総研地質調査総合センター
- 京都府農林部耕地課・滋賀県企画部土地対策課編（1984）京都東北部・京都東南部・水口，土地分類基本調査（5万分の1），京都府農林部耕地課・滋賀県企画部土地対策課
- 千葉徳爾（1973）はげ山の文化，学生社
- 井口正一（1998）田上山の歴史と砂防遺産，砂防学会誌 Vol.51, No.2, pp 45-52
- 瀬田川砂防のあゆみ編集委員会編（1998）瀬田川砂防のあゆみ，建設省近畿地方建設局琵琶湖工事事務所